

戦後文化復興の礎 大嶺薫
— 東恩納博物館旧蔵資料・大嶺薫コレクション再考 —

伊禮 拓郎

OOMINE Kaoru, who became the cornerstone of postwar cultural reconstruction

Takurou IREI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第15号別刷

2022 年3月31 日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.15

March, 2022

戦後文化復興の礎 大嶺薫 — 東恩納博物館旧蔵資料・大嶺薫コレクション再考 —

伊禮 拓郎¹⁾

OOMINE Kaoru, who became the cornerstone of postwar cultural reconstruction

Takurou IREI¹⁾

序

当館には、大嶺薫コレクションと通称される約3,000点の資料群がある。美術工芸・歴史・民俗・考古の4分野にまたがる一大コレクションで、琉球・沖縄の資料を中心に、日本や中国、台湾、アメリカなど、幅広い地域の様々な時代の資料が含まれる。

本コレクションは、戦前・戦後を通して古美術収集を行った大嶺薫(1905-1970)によって集められ、没後に妻・米(米子^{よね})⁽¹⁾の尽力で設立された大嶺薫美術館で展示公開され、同館閉館後は薫の弟・信雄^{しんゆう}⁽²⁾によって沖縄県立博物館(当時)に寄贈されたという収蔵経緯を持つ。

首里大中町の沖縄県立博物館時代は展示室の一角にコレクションを展示するスペースを設け、2007年におもろまちへ移転オープンした沖縄県立博物館・美術館では、年に一度大嶺薫コレクション展を開催し、薫とコレクションを顕彰してきた。

しかし、これまで薫自身のことについて掘り下げられたことはなく、あまり具体的な活動を追えていなかった。

薫没後50年の節目にあたる2020年、薫に関連する新出資料が多数発見された。この資料を基に開かれた同年の大嶺薫コレクション展「文化復興の礎 戦後最初の博物館長・大嶺薫」では、新出資料から薫の足跡を再検証し、その業績を再顕彰した。

新聞・テレビの報道もあったためか、コロナ禍にもかかわらず前年度の2倍以上の方に足を運んでもらうことができた。しかし、新出資料を十分検討す

る時間的猶予が無かったため、まだ検証したりない部分があった。

本稿では、薫の業績を改めて検証し沖縄の文化復興に努めた偉人を顕彰するとともに、彼の集めたコレクションの持つ意義を再考するものである。また、今後の東恩納博物館旧蔵資料・大嶺薫コレクション整理の足掛かりとして、薫の足跡について整理するものである。

1. 戦前(1905~1945)

大嶺薫は、1905年、大宜見村根路銘で生まれる。父・信徳、母・カナ(別名ウシ)の6人兄弟の長男(弟3人・妹2人)として生まれる。

米夫人によって書かれた薫の経歴書⁽³⁾によれば、1921年に沖縄県立農業学校を卒業したとある。1945年までの具体的な経歴は不明であるが、生命保険会社で務めていたとのことである。

しかし、1969年に開かれた「松山王子尚順を語る座談会」⁽⁴⁾において、十・十空襲により那覇の家が焼け首里儀保町に避難したことを語っている。沖縄戦までには、大宜見を離れ首里・那覇近辺に住んでいることになる。

なお、このエピソードを語る中で、子供が負傷したことを述べているため、1944年には結婚し子供を設けていたことがわかる。これまで、薫には子供がいなかったと言われており、それゆえ薫と米の死後に弟・信雄がコレクションを引き継いだとされてきた。しかし、実際には子供がいたようであるが、早くに亡くしたということであろう。

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

同座談会からは、薫と尚順の交流の跡をうかがい
知ることができる。薫は、1944年10月10日の空
襲以前から桃原農園⁽⁵⁾を訪れていたようだが、儀
保町に移り住んで以降、尚順から直接話を伺うよう
になったと述べている。儀保町の「大筑^{おおちく}の婆さん」
と呼ばれる古道具屋の女性に紹介してもらったこと
がきっかけであった⁽⁶⁾。

後述するが、薫は20代のころから骨董趣味に目
覚めていたようだが、尚順からの影響も受けていた
ようである。同じように尚順から様々なことを学ん
だ山里永吉や多和田真淳らとともに、尚順のことを
「桃原大学」の「大学教授」と評し、自身らを「桃
原大学の学生」であったと笑いあっている。さらに、
薫は自身らを「月謝なしの大学生」と笑いながら
語っている⁽⁷⁾。

座談会では、薫が尚順からもらった品々について
も語られている。当時の桃原農園には「白露庵^{はくろあん}」と
呼ばれる建物があり、そこには陶器などが陳列され
ていた。薫は尚順から「好きなものがあれば持って
行け」と言われ2、3譲ってもらったと語っている。
具体的な特徴が書かれていないため何をもらったか
はわからないが、それらは大嶺コレクションに含ま
れている可能性がある。

また、薫の父が「フウイユ」⁽⁸⁾という魚を持って
きたため尚順に差し上げたところ、食料の乏しい時
代であったためか尚順は大変喜び、お礼として表紙
に尚順の好きな品々が書かれた東京の美術倶楽部の
売立目録を数冊もらったとも語っている。その後
も、尚順が貴族院議員時代に仕立てたオーバーや久
米島紬の羽織を頂戴したようである。1969年時点
でオーバーは失っているようだが、羽織は形見とし
て大切にもっていたようである。大嶺コレクション
には染織品は含まれていないため、現在どうなっ
ているかは不明である。

尚順は1945年の沖縄戦のさなかに南部の壕の中
で衰弱死したとされる⁽⁹⁾が、薫が儀保町に避難し
てわずか半年の間に親密な関係になっていたことが
分かる。戦時中、尚順家の男性は皆戦争に行っており、
当時は女性しかいなかった。その寂しさを紛ら
わせる存在の一人が、薫であったのかもしれない。

その後、薫は郷里の大宜味村へ避難し、沖縄戦
の終結を迎える。後述するが、東恩納博物館の収

蔵品には薫の個人所蔵品も含まれているため、多
数の古美術品とともに大宜見村へ疎開していたと
思われる。

2. 東恩納博物館館長時代（1945～52）

2-1. 館長着任の経緯

薫が歴史の表舞台に姿を現すのは戦後すぐのこと
であるが、まずはそのきっかけを作った2人の人物
について触れておく。一人は戦後沖縄において米海
軍軍政府・文教部長を務めたウィラード・A・ハン
ナ（Willard Anderson Hanna）で、もう一人は政
治部長を務めたジェームス・T・ワトキンス（James
Thomas Watkins）である。

この二人は、東恩納博物館の前身となる「沖縄陳
列館」を設立した人物である。二人が博物館を作
った経緯については、沖縄諮詢会会議録⁽¹⁰⁾から見る
ことができる。諮詢会の会議でワトキンスは次の
ように語っている。

「今日沖縄に来ている米兵の印象では首里、那覇
の都会地や旧跡がなくて貧弱なところである
という感じに打たれている。ゆえに沖縄の認識を
深めるために何とか講じたい。今は軍関係しか
いないが、将来は米国の政治や市民等が来るが
彼等の認識を深めなければならない。その方法
として二つの案を持つている。

一、は文教部の建物と博物館を作ったがその建
物や庭を作ったのはその一つである。

二、は博物館と庭は未完成だがこれを完成させ
また沖縄の工芸品も加えたい。

博物館が完成した時にはその他に沖縄を紹介す
るものはないからこれを以つて沖縄の文化の形
を整えて昔の文化を認識し、教育していきたい。」

沖縄諮詢会議録（1945年12月24日）より

上記のような考えのもと設立された博物館だが、
その考えの根底には、軍政府海軍学校（以下、海軍
学校）時代の経験があると考えられる。

二人は、ともにコロンビア大学の海軍学校で軍政
を学んでいる⁽¹¹⁾。1942年、ミッドウェー海戦でアメ
リカが勝利したのをきっかけに、米 국무省は対日占
領政策の立案に着手する。その際、軍政官が必要に

なると見越し、コロンビア大学に海軍学校が設立された。海軍学校では、国際法・民事行政の組織と方法、軍政下の警察司法、経済及び財政、占領予定地の歴史、地理、住民及び習慣、熱帯地衛生、福祉などの教育がなされており、学生は、大学教授や下院議員、市長、都市計画、エンジニアリング、建築などの専門家から選ばれた。ハンナ・ワトキンスもその内の一人である。ハンナらは、同校で教員をしていたG・H・カーと出会い、1944年に『民事ハンドブック 台湾』、『民事ハンドブック 琉球諸島』を刊行することになる。これらのハンドブックは、占領予定地の基礎情報が記されたものである。二人の沖縄文化に対する理解は、海軍学校での学びとハンドブック編纂の経験が根底にあると考えられる。このことを示すように、ワトキンスは次のようにも語っている⁽¹²⁾。

「博物館及びムーレー大佐の邸宅の計画は軍政府の命ではなく、これはハンナ大尉と私（ワトキンス）との考えでやっているものである。ハンナ大尉と私は日本及び支那の文化の程度も知っている。沖縄の文化の程度も知らしめたい。沖縄の文化も此程度あったのだと知らしめたい。」

沖縄諮詢会議録（1945年12月24日）より

二人は生粋の軍人ではなく、海軍学校で軍政を学んだいわゆる「学者軍人」であった。沖縄の文化を守りたいという気持ちも当然あっただろうが、それと同時に、米兵を教育し住民を野蛮人扱いするのをやめさせ、適切かつスムーズな統治をできるようにという政治的思惑もあったのではないだろうか。いずれにしても、文化・教育に理解のある二人の手で博物館が設立されていったのである。

では、ハンナと薫はどのように出会ったのか。薫は次のように語っている。

「（ハンナと）近づきになった最初の動機は私が尚順男爵邸にあつた月見灯ろうや雪見灯ろうを説明、片足のカケたシーサーをセメントで修理して土とカンダバーの葉でぬつたところ上手く出来たのが私がとくに可愛がられたはじめである」

（「ハンナ博士と沖縄（座談会）」より⁽¹³⁾）

「ハンナさんが博物館をつくりたいがやつてくれとたのまれたので私も引受けて一緒につくったわけです」

（「ハンナ博士と沖縄（座談会）」より



図1. 東恩納博物館館長時代の薫（親族所蔵）

前述のとおり、薫は桃原農園に出入りしていたため尚順邸にあった灯籠類を見る機会があった。その際の知識が役に立ったということであろう。このような出会いを経て、ハンナとの交流を深めていく薫であるが、ハンナの求めに応じ博物館設立の手助けを行うようになる。

この博物館が1945年8月、米国海軍軍政府によって設立される「沖縄陳列館」である。陳列館は、軍政府コンセット群の一角に残っていた民家を転用したもので、1946年4月に沖縄民政府が設立されるとともに、米海軍軍政府から民政府に移管され「東恩納博物館」と名称を改める。この館長を、薫が務めることになる。

ただし、1949年に申請された東恩納博物館職員の労務カード申請書（親族蔵）には、1945年に館長就任とある。沖縄陳列館時代から実質的に館長職務めていたと考えられる。

2-2. 収蔵資料について

東恩納博物館は1953年に首里博物館と合併し、琉球政府立博物館となり、何度か名前を変え現在の沖縄県立博物館・美術館となる。つまり、当館の最初期のコレクションである東恩納博物館旧蔵資料は薫らが集めた資料ということになり、当館の基礎を作った一人とすることができるだろう。

2020年に所在が確認された「東恩納博物館収蔵品台帳」⁽¹⁴⁾には、東恩納博物館の収蔵品について記載されている。

台帳は2つ存在し、片方は添付される書類から、琉球政府樹立に伴い群島政府より引継された財産目録を提出するため1952年に作成されたことが分かる。便宜上、この台帳を1952年台帳と呼ぶ。もう一つの台帳は年代等の記載がない。こちらはひとまず不明台帳としておく。

1952年台帳は琉球政府への引継ぎ、つまり琉球政府立博物館へ引き継がれる資料について記されているため、東恩納博物館における最終台帳となるが、備考欄にどのような経緯で収蔵されたかが記載されている。当館にある東恩納博物館時代からの収蔵品には、来歴などが不明なものが多々ある。しかし、この台帳の発見により、資料のいくつかの来歴がわかるようになった。

紙面の都合上すべてを挙げることはできないが、大石獅子（図2）は、台帳発見により資料の来歴が分かるようになった資料の一つである。台帳に「波上宮拝殿石獅子」と名打たれた資料があり、東恩納博物館のヒンプンの前で撮影された写真（図3）からその姿を確認することができる。戦前の波上宮で撮影された「波上神社（官幣小社）の拝殿」（図4・5）には、一対の大石獅子が写っており、本資料が波上宮にあったことが分かった。波上は1944年の十・十空襲で大きな被害を受けた地域で、その際に被災したのであろうか。本来は二体一対であったが、東恩納博物館収蔵時には一体となっている。

また、朱漆巴紋牡丹沈金足付盆（収蔵番号：928）は、台帳の漆器26「朱塗沈刻三巴紋入盆」が該当すると思われ、備考欄に「食籠台円覚寺より」とあることから、ハンナや大嶺らが沖縄戦で崩壊した首里・円覚寺で収集した可能性が出てきた。円覚寺は琉球国王家の菩提寺であるから、そこで収集さ



図2. 大石獅子（当館所蔵）



図3. 東恩納博物館の展示風景（右が大石獅子）
（当館所蔵）



図4. 波上宮拝殿石獅子（那覇市歴史博物館 所蔵）



図5. 図4の画面左 中央部分拡大

れたということは、何らかの祭祀道具として使われていたのではないかと考えられる。

今後、この台帳と当館収蔵品を照らし合わせることで、より多くのことが分かるとともに、薫らの資料収集の足跡を追えるだろう。

台帳には備考欄に「大嶺出陳」と記載されている資料も多数ある。これらは薫が戦前から集めていた個人コレクションで、戦中は薫とともに大宜味村へ避難していたものと思われる。その内の一部と推測されるが、1953年薫名義で琉球政府立博物館に寄贈されている。

この時期の資料収集の逸話として、薫とハンナがジープに乗って荒廃した各地から様々な資料を収集した話が残っている。実際には二人だけで出かけたというわけではなく、何人かの部下を引き連れての収集活動であったと思われるが、その成果品として首里城正殿鐘（万国津梁の鐘）や首里城正殿大龍柱など、今日琉球・沖縄の歴史を語る上で必要不可欠な資料が多数ある。

具体的にどのような方法で資料を探し、選び、運んでいたかは不明だが、当時の収集活動を知る上で重要なエピソードに旧円覚寺楼鐘の収蔵の話がある。

1946年、沖縄の統治が米国陸軍軍政府に移管されるのにあわせ、ハンナはアメリカに帰国することになる。フィリピンを経由した帰国の途中、ハンナはマニラで巨大な梵鐘を発見した。薫は後年、「私はどう鐘（銅鐘）について説明をもとめられたときそれは沖縄でできたものであると答えた。日頃沖縄文化の偉大さを米人達に吹聴しておられるハンナさんのことだから大いに喜んで鐘が沖縄でできたという理由を立証できるかというわけです。それで当時の輸送能力や琉球王を礼賛してある銘などからかんがえてもよそではつくつてないと私見を述べたら大いに喜んでいた」⁽¹⁵⁾と述べている。こうしたやり取りがあり、1947年に楼鐘は沖縄に返還された。ハンナが発見した鐘を薫がどういうものか判断して収集していることから、薫の知識とハンナの権力の両方があって戦後直後の収集活動が成り立っていたことが伺える。

また、1952年台帳の添付資料には下記のことが記されている。

「備考

当館蔵品は終戦直後壕或は灰燼中より発掘或は採集されたるもの並に米兵に依り集められたるものを収蔵し下級品多く一流品と思はるものは口不完全品で尚私蔵品並私蔵品と見なさるゝ物の出陳多数多数で民政府時代に旧所有者に返還せるものもあり民政府移管後は蒐集費としての予算はなく依って購入品はなく現収蔵品中にも旧所有者からの返還要求あるものもあり当館財産は官有としての評価は至難である」

（1952年台帳より）

戦後に壕や灰燼の中から発掘や採集したこと、米兵により資料が集められたこと、資料の重要度も様々であるが中には尚家私蔵品も多数含まれることなど、当時のリアルタイムの記録が薫自身の直筆で残されている。

また、資料返還についても触れられている。どれだけの資料を旧所蔵者に返還したかは不明だが、現在残っている文書記録から1949年と1953年に複数の資料を返還していることが分かる。

その一つに、金武観音寺の釈迦三尊像や大日如来像などがある。同資料は、ハンナが中心となって収集してきた資料である。現住職によれば、戦後の混乱に乗じ米兵や日本兵が盗み出さないよう博物館で預かるという話だったようである⁽¹⁶⁾。このことについては、沖縄諮詢会議録の「ハンナ大尉は古跡の破壊されるのを恐れ金武寺の仏像や首里から金を持って来て東恩納の博物館に保管して居る」という山城篤男の発言記録に符合する⁽¹⁷⁾。このような経緯で収蔵された金武観音寺の仏像類は、しばらく博物館の主たる資料として床の間などに展示されていた（図6）。



図6. 博物館で展示される金武観音寺の諸仏（当館所蔵）

しかし、1949年5月1日付で当時の住職・大西法晃氏より「前略毎度御願口に□□□失禮してゐます来る十四日は旧五月十八夜に當り□□恒例の法要を勤めます故それまでに□て□御本尊像を御迎へ致したく存じます故御預りの佛像並に佛具類御返納下さひますよう御配慮の程御願ひ申し上げます」⁽¹⁸⁾との内容で資料返還の申し出がなされる。

これを受け薫は、1953年5月3日に「金武観音寺仏像並二仏具返還ノ件」として文教部長山城篤男宛に資料返還の許可を求め、6月4日に許可が出される。

その後、6月9日に本庁職員新里栄三立会いの下12件の資料が返還され、翌日には「博物館所蔵品返戻について」として文教部長宛に返還が完了した報告がなされ一旦の落着をみている⁽¹⁹⁾。この記録には大日如来像の返還について記録はあるものの、本尊である釈迦三尊像に関する返還の記述がない。しかし、現在金武観音寺に本尊が安置されていることから、記述はないものの6月9日に返還されたか、それ以降に返還されたものと思われる。

他にも、同年には護得久朝章氏に資料を返還したほか、1953年には金城清松氏や川平朝伸氏ら6人に資料を返還していることが分かっている⁽²⁰⁾。

では、この2年に資料返還が集中しているのはなぜだろうか。そのカギとなるのが2つの東恩納博物館収蔵台帳である。

1952年台帳は、前述の通り琉球政府への引継ぎのために作られた台帳である。不明台帳は、1949年に返還された金武観音寺の諸仏に関する記載がすでないため、返還後の1949年6月以降に作成された台帳と考えられる。1952年台帳が統治機構の移管に伴い作成されたことを考えれば、群島政府に統治機構が移管される1950年またはその前年に財産引継ぎのため不明台帳が作成された可能性が推測される。

1952年に引継ぎのための台帳が作成され、その際に返還済みまたは予定の資料を書いていないことから1953年の資料返還は台帳整理に併せて行われた可能性があり、1949年の返還も同様の理由で行われた可能性が考えられる。今後、より詳しく精査する必要があるだろう。

いずれにしても、薫とハンナたちによって集めら

れた資料は、個人宅を改造整備した沖縄陳列館で展示された。もともとは平良栄徳氏の住居であったが、戦後空き家になっていたことから、ハンナらが沖縄陳列館の展示施設として使用。庭園や離れなどはもともとなく、ハンナの指揮のもとに整備された。

萩尾俊章は、沖縄諮詢会会議録の記録から庭園が1945年12月には完成していないことを指摘している⁽²¹⁾。庭園完成当時の記録などが無いことから、これまで具体的な年代は明らかにされてこなかったが、当館のフィルム記録にハンナが庭園で撮った写真(図7)がある事から、1945年12月からハンナ帰国前の1946年8月までの間に完成したと推測される。



図7. 博物館庭先で撮ったハンナの写真(当館所蔵)

この庭園は、ハンナらが作らせたもので、庭園の無かった敷地内に盛土をして水路を引き、そこに様々な植物を植え、灯籠を置き、日本風の庭園を作り上げている。作業には米兵の他、沖縄の人と思われる人々も従事している。

なお、萩尾はこの庭園に「金環園」という名称である事、その当時の扁額が今も当館に残っていることを明らかにしている⁽²²⁾。この扁額は、屋部憲(号:

金澄)によって揮毫されたもので、「沖縄民政府誕生記念」とある事から1946年に作られたと推測される。庭園の名前もこの時期につけられたものであらうと考える。

2-3. 博物館としての活動

もともとは米軍人の教育施設としての側面を持って誕生した博物館だけに、来館者は米軍関係者が多い。

来館する米軍人は、佐官・尉官クラスを「将校入館」、それ以下の役職を「米軍関係」として記録している。薫が文教成人教育課長に報告した1949年10・11月と11・12月の行事月報(親族蔵)には、1949年11月27日の記録に、「米軍関係参観人一八八名内団体参観一二四名将校八名(中佐一、少佐一、大尉二、中尉四)」とある。米軍人の中でも、団体見学と個別の来館があったことがわかる。連日米軍人の来館者があるが、沖縄県民の来館も区別して記録が取られている。

同年11月1日には「中泊部落有志十名」や「石川中学生団体」等の来館が記録され、薫が対応したことも記録されている。米軍人の教育施設としてだけでなく、沖縄住民の教育施設としての側面も持っていたようである。そのことを示す資料として、石川市婦人部長石川朝子から薫宛に出された手紙(親族蔵)がある。要約すると、婦人会の幹部の博物館見学のお礼について書かれているが、文中に当時の住民が博物館をどのように見ていたかうかがい知ることができる一文がある。

「(前略) …しかし未曾有の戦禍と共に幾多貴重な我が郷土の文化材が失はれた事を思ひます時眞に残念でなりません 嘆かばしい次第で御座います。

かうして今や我が沖縄は凡ゆる文化材を失ひましたが不幸中の幸と申しませうか、少ないながらもあれだけのものが蒐集せられ、一般沖縄民の文化指導に資していただけることは何と申しまして有り難い極みで御座いまして、きつと沖縄人の誇りと自覚を取戻すことが出来ることでございませう それにつきまして先生方の御苦心と御苦勞に對し中心より感謝の意を表して

やまない次第で御座います。さうして先生方の御かげをもつて新沖縄の文化は世界に誇り得るところにまで高まつて参りますことを信じます … (後略)」

(石川朝子からの手紙より一部引用⁽²³⁾)

この手紙には「三月二十五日」としか記されていないが、「ハンナ先生にも宜しく」とあることからハンナが沖縄を離れる前の1946年の手紙と思われる。そうであるならば、1946年4月に東恩納博物館となる前の時点で沖縄住民の観覧が可能であったことになる。どれほどの人が観覧できたかは不明だが、沖縄戦で先人たちが作り上げた文化が破壊され傷心していた県民にとって、破片であれども誇りを取り戻せるほどに心強い存在となっていたことがうかがい知れる。

展示観覧とは別に、沖縄住民向けに資料の貸し出しも行っていたようである。1949年3月29日付の石川高等学校長・野崎眞宣氏からの手紙(親族蔵)には、同年3月14日より4日に渡って開催された同校寄宿舎落成御礼学芸会において、博物館所蔵の「御衣裳」を借りたことに対する御礼が記されている。どのような衣裳を貸し出したかは不明であるが、展示活動以外にも地域に根差した活動を行っていたことが伺える。

戦後、『おもろさうし』や聞得大君御殿黄金簪など琉球王国文化を象徴する資料が海外流出をしていた。そのことを思うと、薫らが資料を収集・展示し結果、龍柱や万国津梁の鐘などは流出を免れ、当時の人々が観賞することができ、住民の心の支え、そして未来へと歩みだす後押しになったのではないかと考えられる。

3. 文化財保護に関する活動(1950～60年代)

1949年に「沖縄史跡保存会」が結成される。この保存会はいわゆる文化財保護委員会の走りの存在で、結成当時の記録には「戦後、日未だ浅く、人身荒廃して、生活安定しない時期であつたため、無自覚な一部の者達のために、名勝旧跡が次第にあらされつつあつたことは、心ある人を憂慮させ、一日も等閑に附すべきでないという世論を喚起し、ここに誕生した」とある。

3年後の1952年、琉球政府が誕生するタイミングで保存会は「琉球文化財保護会」へと発展解散していく。保護会は、「1. 文化財保護法案の作成」「2. 文化財の展示会」「3. 芸能祭」「4. 博物館の充実強化」を主な事業計画として活動し、1954年6月に「文化財保護法」を制定し「文化財保護委員会」とその諮問機関である「文化財専門審議会」が設立された。

薫は、沖縄史跡保存会、琉球文化財保護会の両方に所属しており、琉球文化財保護会においては「史蹟、名勝」専門の常任委員として「文化財保護法」制定の準備などに勤めた。なぜ古美術収集を行っていた薫が史蹟・名勝の委員となったのかは不明であるが、貴重な文化人であったことは大きな要因の一つであろう。

文化財保護法制定以降は、文化財専門審議会の専門委員として史跡や有形文化財の調査、審議を行っている。専門委員としての活動をまとめたのが表1である。

表1. 文化財専門審議会専門員の経歴

年	文化財専門審議会専門員としての経歴
1954	文化財保護調査会（史跡）
1955	第3専門審議会 審議委員
1956	専門委員（史跡名勝天然記念物 史跡担当）
1957	専門委員 有形文化財（第一分科会）
1958	専門委員 有形文化財（第一分科会）
1959	専門委員 有形文化財（第一分科会）副会長
1960	専門委員 有形文化財専門委員（第一分科会）副会長
1961	第一分科会 会長
1962	第一分科会 会長
1963	不明
1964	不明
1965	第一分科会委員及び刀剣審査委員

1957年の文化財調査の依頼文（親族蔵）には、名護の勾玉調査の際は特に出席することを求められている。大嶺は様々な種類の美術工芸品をコレクションしていたが、勾玉もコレクションを代表する分野の一つである。当館にも大嶺コレクションとし

て複数の勾玉が伝来している。また、武具類にも造詣があったようで、1965年には文化財専門委員の刀剣審査委員も務めている。薫自身は研究者として学んでいたわけではないが、趣味としていた収集活動を通じ様々な知識を蓄え、結果的にその経験が文化財保護の一助となったのである。

余談であるが、薫の文化財保護の意識は東恩納博物館館長時代から芽生えていたようで、終戦直後瓦礫の中から文化財が散逸するのを懸念し、「この石をこわすと罰があたる」という立札を建てて保護した逸話がある⁽²⁴⁾。

一私人、一コレクターを超え、名実ともに戦後文化復興を担う意識が芽生えた証であろう。

4. 実業家としての足跡（1950～60年代）

薫は東恩納博物館の館長や文化財保護の活動を行う傍ら、実業の世界にも進出する。

最初に役職を務めたのは大東糖業株式会社である。『大東糖業30年の歩み』⁽²⁵⁾によると、同社は後に「沖縄経済界四天王」の一人に数えられる宮城仁四郎によって起業されているが、その設立メンバーとして薫も名を連ねている。

仁四郎は薫の叔父にあたり、仁四郎に声を掛けられたのが実業界に入るきっかけのようである⁽²⁶⁾。

表2は、薫が歴任した会社・役職である。大東糖業就職後から亡くなるまでの20年の間に、少なくとも15の企業で役職についていたことが分かっている。この内13の企業は、仁四郎が社長・会長または役職についていた会社である。

『琉煙20年の歩み』には、仁四郎が琉球煙草を創業する際に大東糖業から融資を受けたことが記されている⁽²⁷⁾。援助の際、仁四郎は薫たち大東糖業の幹部らと融資について相談し、薫らはそれを快諾している。薫は仁四郎の良き理解者であり、良きパートナーだったようだ。

大東糖業内では、1954年に常務取締役、1959年に専務取締役と徐々に出世し、同社の重役として仁四郎とともにメディアに露出することも増えてくる。『オキナワグラフ』1959年1月号には企業の年頭挨拶の欄に仁四郎、宮城清昌常務とともに写った写真が掲載されている。これ以後の年も年頭挨拶欄に仁四郎とともに写真や名前が掲載されている。

表 2. 実業家としての経歴

年	社 名	役 職
1950年	大東糖業株式会社	監査役
1954年	大東糖業株式会社	常務取締役
1957年	沖縄製缶工業株式会社	監査役
1958年	沖縄汽船株式会社	監査役
	沖縄テレビ株式会社	取締役
	琉球殖産株式会社	取締役
	北大東製糖株式会社	取締役
1959年	大東パイン産業株式会社	取締役
	大東糖業株式会社	専務取締役
	琉球セメント株式会社	取締役
1960年	琉球洋酒株式会社	取締役
	琉球煙草株式会社	取締役
	沖縄第一倉庫株式会社	監査役
1961年	総合紙器株式会社	取締役
	那覇文化センター	取締役
1966年?	中央畜産株式会社	監査役

また、大東糖業が創業10周年を迎えた1960年の9月27日には、教育会館ホールで10周年記念式典が催されている。式典の様子が『オキナワグラフ』1961年1月号に特集が組まれているが、社員を代表して薫から仁四郎へ胸像とともに感謝状が手渡されている写真が掲載されている⁽²⁸⁾。名実ともに仁四郎の片腕となった様子がうかがえる。

薫は大東糖業で務める傍ら、様々な会社で役職を務めている。1960年には琉球洋酒株式会社の取締役役に就任している。同社役員としての仕事の一端なのか、1963年に開かれた沖縄寿屋ビル落成やサントリービール発売等を祝した祝賀会に、グラスを片手に参加している薫の写真が残されている⁽²⁹⁾。1957年に監査役として就任した沖縄製缶工業株式会社が創立10周年を迎えた1967年には、他の職員とともに来賓へ挨拶する様子を写した写真も残っている⁽³⁰⁾。

これまで実業家としての薫の足跡がないことから、名前だけ役員に連なっているのではないかとの見方もあったが、会社の重役としての意識を持ち、社

を代表して様々な式典・行事に参加していたことがうかがえる。

その証左として、1969年に行われた琉球商工会議所の役員・議員選挙において見事1号議員として当選している⁽³¹⁾。復帰を間近に控えた時期に行われた選挙であったため、実業家としての力がなければこの時期に当選することはありえないだろう。骨董趣味の趣味人としてのイメージが強い薫だが、実業家としての力も併せ持った人物であったと考えられる。

また、薫自身の名刺及び新聞記事から、薫が経営する店もあったことがわかる。1959年1月26日の琉球新報の記事には、薫が経営する「ピース旅館」が美栄橋にあること、松尾通りで古美術品展店「金環堂」を経営していることが記されている⁽³²⁾。金環堂については、外観の写真(図8)が残されており、図9は金環堂の店内の写真である。もともとは崇元寺のあたりに建っていたが、のちに国際通り沿いに移転している⁽³³⁾。



図 8. 金環堂の外観 (平良睦博氏 所蔵)



図 9. 金環堂店内で撮られた薫の写真 (親族所蔵)

金環堂は、もともと古美術品を扱っていたが、観光客増加に伴い土産物も扱うようになり、ウィスキーなどの洋酒の他、県内の土産物店として初めて泡盛や沖縄のお菓子を販売していた⁽³⁴⁾。また、金城次郎をはじめとする当時の名工の作も多数販売され、濱田庄司や山中貞則をはじめとした各界の著名人も訪れる店であった。

店自体は平良定直氏が運営していたが、オーナーである薫も度々顔を出していたようである。当時は壺屋で焼かれた陶器を販売しており、焼き上がったものは他店に卸されないよう急ぎ持ってきたとのことである⁽³⁵⁾。そのため、元従業員である村田竹一氏は卸した陶器の底面を整えるためにサンドペーパーをあてる作業を行っていたが、ハサミでペーパーを切ろうとしたところ、薫に「ハサミがダメになるから手で切る方がよい」と優しく指導してもらったと語っている。また、定直氏の息子で、当時小学生だった睦博氏は薫に頭をなでてもらったと思い出を語っている。二人によると、とてもやさしく穏やかな人物であったそうだ。

金環堂は、薫の没後は米が、米の没後は従業員が引き継ぎ2000年代まで営業し、後年はNHK朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」のロケ地としても使用された。

5. 趣味・知識人として（1950～60年代）

5-1. 趣味人として

前述したとおり、薫は沖縄戦直前には尚順男爵と交流を持ち、骨董に対する理解を深めたことが分かる。ではどう言った経緯で骨董趣味に目覚めたのだろうか。

『オキナワグラフ』に組まれた「私のコレクション」⁽³⁶⁾のインタビュー記事には次のようにある。

「私が印籠をあつめたと云う動機は別にない。私が琉球の郷土史研究に興味をもちその資料として琉球の古文化財をあつめだしたのがはじまりで自分でも気狂いではないかと思う程、こり出した。古文書、書画、陶磁、織物、漆器、刀剣、古銭、玉類と手あたり次第集めたもので戦前は、実に素晴らしいものがあった」

（『オキナワグラフ』1959年1月号より）

このことから、郷土史研究の延長上で資料収集が始まり、それが趣味に発展していったことが分かる。また、戦前には資料収集を始めていたことも明言されている。

1959年1月26日の琉球新報の記事「さながら小美術館 温故知新の骨董あさり」では、20代のころから郷土史研究を始めたこと、その延長上として書画や古書文献を集め始めたことがきっかけである事を語っている。また、資料収集の方法については次のようにある。

「金のない一青年には高い金を払って骨董商から買い集める経済力などあろうはずがない、それで目をつけたのが首里、那覇の質屋や古道具屋である。そのころまではまだ旧家が骨董品を質に入れ、古道具屋に払い下げたのがあった。こういう風に割に安価な方法でホコリの中から宝を手に入れることができた。」

（琉球新報1959年1月26日より）

前述した首里儀保町にある古道具屋の「大筑のばあさん」の店に出入りしていたのも、このような収集方法ゆえのものと考えられる。

このような方法で収集された薫のコレクションだが、代表的な収集品として陶器がある。当館に収蔵される薫コレクションにも同器種の陶器が複数あるが、同じような資料を多数集める趣味人としての薫を示す座談会記事がある。

『オキナワグラフ』1967年6月号には「陶器を愛す」と題した座談会の様子が掲載されている。徳田安周を司会に、薫の他、山里永吉、金城次郎、小橋川永昌、新垣栄三郎がそれぞれ陶器の魅力を語っている。その中で薫は次のように語っている。

「女遊びという不謹慎な感じもありますが、女の顔が十人十色であるように、焼物も十種十色で「同じものを作ってくれ」と頼んでも、カマから出てくるものは同じものではない。その上、その美しさときたら、ほんとに女性にひと目惚れするようにぞっこん参りますね（笑）とにかく同じものを集めようと思っても、同じものは決して出てこないものです。陶器のどこがいい

のかと言われても自分でも説明しにくい微妙なものがありますね。

集めていくうちに、次第に病的になってしまう。まあ恋の病は「お医者さまでも草津の湯でも」といいますが、ヤキモノも同じですよ。私もどうしてこの道に入ったのかははっきりしませんが、山里さんのいわれるように、一つ一つのものが形において、色において、また釉薬の味などといったものが想像もできない味わいをもっているからですよ。そして、もっといいもの、もっといいものと追及していくうちに琉球の歴史に興味を持つようになりました、

歴史といっても、私のは裏面史の方で、調べていくうちに曾我書画をあつめるという副産物もありました。」

（『オキナワグラフ』1967年6月号）

この記事にある通り、当館に伝わる薫コレクションには40点の徳利があったり、勾玉が80点以上あったり、『オキナワグラフ』1959年2月号⁽³⁷⁾には80点余りの印籠をコレクションしていることが紹介されていたりと、同じ種類の資料を多数集めている。

5-2. 知識人として

こうした収集活動や、尚順男爵をはじめとする様々な人との交流をもとに、薫はやがて知識人として活躍していく。

1961年9月20日に沖縄と本土を結ぶ空の架け橋として、全日空の鹿児島―沖縄便が就航している。この一番機には、鷹司平通・和子（旧名：孝宮和子内親王）が同乗している⁽³⁸⁾。『オキナワグラフ』1961年11月号では、鷹司夫妻が守礼門やひめゆりの塔、健児の塔などを訪れたことが記されているが、その一つとして薫が琉球政府立博物館を案内している様子も紹介されている。当時の写真が親族の家にも残っており、博物館を案内しているほか、健児の塔へも同行し植樹の場面に立ち会っていることが分かる（図10・11）。鷹司家は五摂家にも数えられる公家の名門であり、和子夫人は皇族の出である。博物館の職員ではない薫がその案内を任されたのは、知識人として認識されていた証左だろう。



図10. 琉球政府立博物館で鷹司夫妻を案内する薫（親族所蔵）



図11. 健児の塔で献花する鷹司夫妻と後ろに立つ薫（親族所蔵）

1967年11月6日ハーバービュー倶楽部新館の記録が残る国際婦人会の写真（図12）には、大勢の前でコレクションを広げ、講演を行っている様子が記録されている。別の角度からとったと思われる図13には着物姿の女性の他、外国人の姿も多数写っている。広げているコレクションは勾玉や道鑑などで、沖縄や日本の文化を紹介しているものと思われる。

このような講演会は何度か催されていたようで、薫が知識人として多くの人に自身の身に着けた知識を還元していた様子が分かる。



図 12. 国際婦人会で講演する薫



図 13. 国際婦人会の様子とされる写真（親族所蔵）

5-3. 国境を越えた友情

薫の趣味人としての逸話に、デイビット・M・シュープ（David Monroe Shoup）との友情と渡米の話がある。

シュープは、アメリカ合衆国海兵隊の軍人で、1958年3月～1959年4月にかけて、米海兵隊第3海兵師団の司令官（在沖中の階級は少将）として在沖していた。

薫との出会いは不明だが、骨董趣味を通じ薫とプライベートな交流があり、古陶の指南役を務めていた⁽³⁹⁾。薫の家に招いたことも度々あり、またシュープからも晩餐会に誘われることもあった。シュープ帰国前の晩餐会には夫婦ともども招かれ、薫はこの晩餐会で使用された皿を一枚求めている。シュープは何の変哲もない米軍の器を欲しが理由を尋ねたところ、「あなたが米国に帰って大將になられた

とき、この皿は私にとって大きな喜びの為の記念になる」と答えている⁽⁴⁰⁾。薫のコレクターらしさ、シュープとの友情が伺える。

アメリカへ帰国後、シュープは米海兵隊総司令官に就任した。1963年に司令官をやめるまでの間に3度視察のため来沖しているが、その際薫は空港まで出迎えに行っていたようである。その様子が米統治下の沖縄における英字新聞「Morning Star OKINAWA」の1963年10月3日号に掲載されており、記事と同じ写真が大嶺家に残っている（図14）。記事には次のようにある。

[U.S. Marine Commandant Gen. David M. Shoup present a carved, American Indian work to Kaoru Omine, managing director of the Daito Sugar Co. in Naha. Omine, well-known for his curio collection, has been a close friend of the commandant since 1958 when Shoup, then a two-star general, served a tour here as commander of the 3rd marine division shortly before being named the top marine.]

（「Morning Star OKINAWA」1963年10月3日）

薫が骨董趣味を持っていることやシュープとは1958年からの友人であること、そしてこの年の来沖時にシュープがアメリカインディアンの彫刻を薫にプレゼントしたことが記されている。大嶺薫コレクションの中には、「インディアン立像」（当館資料番号9631）がある。収藏品台帳には詳しい来歴は記録されていないが、1963年にシュープから贈られたものと考えられる。

シュープ到着の日にはレセプションが催されている。薫夫妻も招待状（親族所蔵）をもらっており、15日には第3海兵隊マスターズ少将より直々にレセプションの写真が送られている（図14）。

シュープは帰国後すぐに薫をアメリカに招いている⁽⁴¹⁾。薫は過去に数度渡米を進められていたようだが、1963年はシュープが海兵隊総司令官の職にある最後の年であることから渡米を決めたようである。このことについて薫は次のように語っている。



図 14. シュープを出迎える薫夫妻（親族所蔵）

「合衆国海兵隊総司令官という高官が沖縄の一住民であるわたくしを、個人的友情から、しかも近く総司令官の職を離任なさるといふ最も多忙のおりにもかかわらず招いてくださったご厚情に対し、わたくしはことばに言い尽くせぬ感激に打たれた。」

（『守礼の光』1964年4月号より）

こうして薫は往復40日の旅程で、ワシントンを皮切りにニューヨーク、ボストン、シカゴ、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ハワイの主要都市を旅したのである。

現地時間11月8日17時にワシントンの空港に降り立つ。そこでは、シュープ自らが出迎え、世話役のトーマス少佐の案内の元、ワシントンの司令官官舎へ行き歓迎パーティーが催された。パーティーにはスミソニアン美術館のL・カーミカエル館長やフリーア美術館のJ・A・ボブ館長なども出席し、大歓迎されたようである（図15）。シュープは徳利収集を趣味としており、官邸内の写真には、そのコレクションが写っている。その後、薫はこの官舎の2階、シュープの部屋の隣に宿泊している。

11月11日には、アーリントン墓地で行われる米国在郷軍人記念日の式典に出席している。この式典には当時のアメリカ合衆国大統領J・F・ケネディが参列していた。当初ケネディは無名戦死者の墓に献花して帰る予定だったようだが、予定を変更しその後の第2祭典に参加している。薫はシュープの招

きによりこの祭典にも出席し、「記念館の祭典においても階上の来賓席につらなり、特にケネディ大統領にも身近に会えたことについて身に余る榮譽で今でも胸がいつばいにわいてくる」⁽⁴²⁾とその気持ちをつづっている。また、渡米前にはすでにケネディと会える可能性があることを分かっていたようで、沖縄住民としての思いを伝えたいと考えていたようである。



図 15. シュープ邸にて取られた写真（親族所蔵）

「わたくしは幸いにしてケネディ大統領に面会することができたら、という夢をいだいて渡米した。沖縄の一住民としてアメリカ合衆国の沖縄援助に対してお礼を申し上げたい。特にわたくしの郷里に昨年落成した塩屋橋に対する住民の喜びをお伝えした。また今度高等弁務官府から発表された沖縄の博物館建設資金の援助に対し、沖縄の文化財を守る立場にある者のひとりとして感謝申し上げ、こうした公共事業の援助こそは米琉親善の最上のものであるので、今後ともよろしくお願い致したい。そしてささやかながら沖縄の民芸品である紅型と、塩屋橋の油絵、ならびにふっこうした沖縄の現状写真帳をおみやげに贈呈し申し上げたいと考えていた。」

（『守礼の光』1964年4月号より）

沖縄住民として、そして文化財の守り手として様々な思いがあったようである。なお、この時プレゼントされる予定の油絵については、高等弁務官府の写真ニュースでも取り上げられている（図16）。これによると、慶田喜一氏が描いた塩屋橋の絵2枚を、ケネディとシュープに贈る旨が記されている。



図 16. 慶田喜一氏の油絵を掲げる薫
(沖縄県公文書館 所蔵)

日程的な都合もあり、ケネディへ直接手渡されることはなく、シュープから手渡されることになった。しかし、それから数日後の11月22日、ケネディは世界が知るような凶弾に倒れなくなってしまうのである。薫が贈った品々がケネディの手に届いたかは不明だが、今もアメリカの地に眠っているのかもしれない。

薫の渡米に合わせて、宮城仁四郎と山里永吉が那覇空港まで見送りに行ったそうだが、仁四郎は「文化というものは恐ろしいものですな」と言ったことを山里が記録している。この発言を山里は「文化によるきずなは、無官の一市民をして、米海兵隊大將から招待されるという強い力をもっている、という意味である」と解釈している⁽⁴³⁾。

20代から趣味として始まった収集活動が、やがては国を超え、そして立場を超えた友情をはぐくんだことがよくわかるエピソードである。

6. 大嶺薫美術館の設立（1971年～）

6-1. 大嶺薫美術館設立の経緯

戦中・戦後の激動の時代を乗り越え復帰が見え始めた1970年10月4日、薫は65年の生涯に幕を閉じた⁽⁴⁴⁾。

薫は生前より「ちょっとした東洋美術館をつくりたい」⁽⁴⁵⁾と語っており、コレクションを元に美術館設立を考えていたようである。その思いは米たち遺族に引き継がれ、「財団法人大嶺薫美術館」が設立される。

沖縄県公文書館が所蔵する「財団法人大嶺薫美術館設立許可について」の一件書類から、設立当時の状況が見えてくる。

一件書類の一つに「設立準備会決議録」がある。この決議録によると、1971年5月21日午後3時より、大嶺米宅にて米（妻）、大嶺信雄（弟）、浜元栄吉（義弟⁽⁴⁶⁾）、大嶺正光（甥⁽⁴⁷⁾）、饒平名長英（義弟⁽⁴⁸⁾）、山里永吉（友人・専門家）が集まり、3つの議案について決議している。

第1号議案は「故大嶺薫の寄附行為により財団法人の設立許可申請をなす件について」で、出席者の賛同を得て、米を理事長にし権利を継承することが全会一致で承認される。

第2号議案は「財団法人大嶺薫美術館の役員について」で、理事長を米、理事を信雄・浜元・正光・岸秋正（収集家・大東糖業時代の薫の部下）、監事を長英・宮城稔（詳細不明）、美術顧問を山里永吉・外間正幸（琉球政府立博物館館長）が務めることをそれぞれが同意している。

第3号議案は「役員の権限について」で、寄附行為（後述）の13条に基づき、理事長は法人を代表し会務を統括すること、理事は理事会の議決に基づいて会務を執行すること、監事は民法第59条に定める職務を行うこととしている。また、14条に基づき、美術顧問は美術専門家に委嘱し、理事会の諮問に答え、理事会に対し随時意見を述べるができることとしている。

この日の決議を経て作られたのが一件書類の一つ「財団法人大嶺薫美術館寄附行為」の書類一式であると思われる。同書類の最後に「1970年8月8日」と記載されているが、この年月日では薫がまだ存命で内容に矛盾が生じるため、1971年8月8日の誤記と思われる。全26条及び附則からなり、第1～3条で薫から財団法人に古美術品を寄附し、那覇市美栄橋3丁目13番地4に「大嶺薫美術館」の名称で設立する旨が示される。

第4条では「この財団法人は古美術品を展示し、

一般に公開することによつて、沖縄の美術工芸文化の向上及び文化財の保持に役立たしめることを目的とする」とし、第5条では、第4条の目的を達成するために美術館を設立し(1)記念行事、(2)古美術品の展示と一般への公開、(3)特別展示会、(4)図録の出版、(5)その他目的達成に必要な事業を実施するとしている。

第6条以降は、館の運営や予算、体制などについて示されているが、本稿では紙面の都合上割愛する。親族を中心とした運営形態ではあるが、薫の意思を米らが引き継いでいったこと、そして山里や外間といった専門家を加えることでより本格的に設立に動き出した様子がわかる。

決議が行われる前日の1971年5月20日付で、米は「設立趣意書」を記している。そこには次のようにある。

「これ(大嶺薫のコレクション)を多くの人々の鑑賞に供し、展示することは沖縄の美術工芸文化向上のために寄与するばかりか、沖縄の文化財としての保存価値もあり、更に沖縄のとぼしい観光資源の素材を提供するという効用も考えられ、本美術館設立はあらゆる意味において大きな意義と価値があると信ずるものであります。」

(沖縄県公文書館蔵「財団法人大嶺薫美術館設立許可について」設立趣意書より)

この様に薫の意思を引き継いだ遺族の思いがあり、1971年9月21日付で「財団法人大嶺薫美術館設立申請書」の一件書類が琉球政府中央教育委員会へ提出され、翌9月22日に議決・許可された。

美術館の場所は、「那覇市美栄橋3丁目13番地4」となっているが、大嶺薫美術館のパンフレットには「那覇市久茂地3-15-2」とある。予定地から場所が変更になったものと思われる。パンフレットには病院通り(那覇市市道9号)沿いに立っていることが示されているが「大嶺薫美術館所在予定地」の地図(図17)からより具体的な場所が確認できる。大嶺薫美術館の写真は現存が確認されていないが、『全国博物館総覧 下巻』にかろうじて外観を確認することができる(図18)。『全国博物館総覧』に掲

載されている写真では、入り口に看板が掲げられている。この看板は現在当館に収蔵されている。島袋光裕氏(号:石扇)の揮毫で、木板に篆書体で「大嶺薫美術館」の字を墨書している。

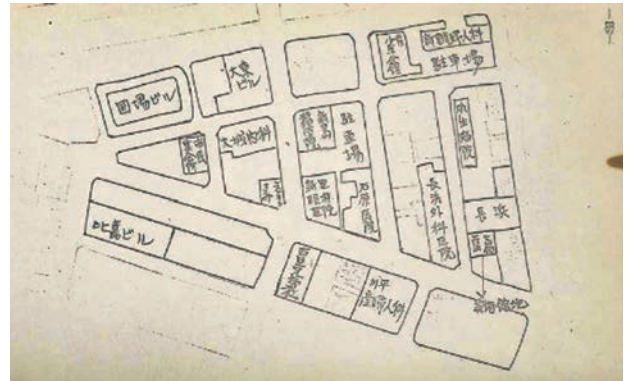


図17. 大嶺薫美術館所在予定地の地図
(沖縄県公文書館 所蔵)

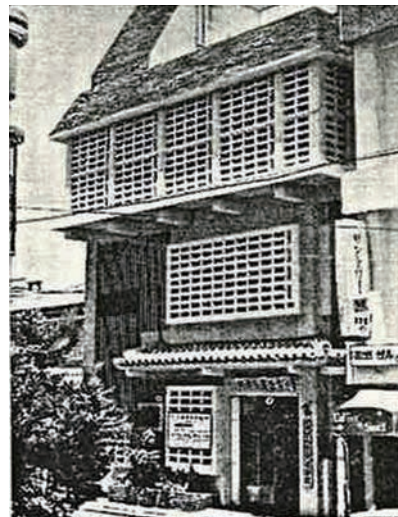


図18. 大嶺薫美術館の外観
(『全国博物館総覧 下巻』より転載)

6-2. 博物館の活動について

琉球政府中央教育委員会より、1971年9月22日付で設立の許可が公示され、10月に設立登記がなされる⁽⁴⁹⁾。「財団法人大嶺薫美術館設立申請書」の一件書類の「1971年財団法人大嶺薫美術館事業計画」にも10月1日を開館予定日と定めていることから、同日に開館したと思われる。

同事業計画書には、開館記念行事として「文化財についての専門家による講演」が予定されているが、

実施されたかは不明である。

また、各種特別展示会として玉類の特別展示会（1971年11月中）、古鏡の特別展示会（1972年2月中）、古銭の特別展示会（同年3月中）、陶磁器の特別展示会（同年4月中）、彫刻の特別展示会（同年5月中）、書の特別展示会（同年6～7月中）、画の特別展示会（8～9月中）を計画している。同一件書類の「1972年財団法人大嶺薫美術館事業計画」も、ほぼ同じ月に同じテーマで展示を行う計画になっている。唯一異なるのは、7～8月頃に夏休みにおける子供のための展示会を設けている点である。この2か年分の展示計画を見ると、1～2月に一度展示替えを行う計画だったことが見えてくる。

実際にどのような展示が行われていたかは定かではないが、パンフレットにある展示室の写真からは絵画や彫刻が同時に展示されていることが分かる（図19）。また、美術館の展示室の平面図から、美術館の1・2階で様々な分野の資料が同時に展示されている様子が分かる（図20・21）。運営していく中で、当時の計画とは異なる展示手法になったものと思われる。



図19. 大嶺薫美術館の内観
（大嶺薫美術館パンフレットより転載）

なお、展示室は1・2階で、3階は米の居住スペースになっている⁽⁵⁰⁾。なお、元職員の柳生郁子氏によると、1階には土産物店と貸しギャラリー、2・3階が展示室、4階が共住スペースとなっていた。『全国博物館総覧 下巻』には、1階に沖縄工芸館が

併設され現代沖縄の伝統工芸品が展示即売されていたとあるが、これが貸しギャラリーだったとのことである⁽⁵¹⁾。なお、このギャラリーでは古物の展示ではなく、当時の作家・芸術家による作品展が行われていたとのことである。

美術館は日曜休館、月～土曜・祝祭日は10～18時まで開館し、入館料は大人300円（団体240円）、学生200円（団体160円）、小人150円（団体120円）となっている⁽⁵²⁾。

『全国博物館総覧』には、事業内容として各種展覧会への出品の他、生花・茶道教室を実施しているとある。館長を務める米は、茶道を嗜んでいたとの話があり⁽⁵³⁾、生花・茶道教室は米が開いていたと思われる。

美術館には金環堂の職員も度々出入りしていたようで、米とともに展替え作業も行っていた⁽⁵⁴⁾。また、1975年の沖縄国際海洋博覧会や京都国立博物館『沖縄の工芸』展に資料を貸し出している。沖縄有数の貴重な資料を所蔵する美術館として認識されていたようである。

館の運営は、館長兼理事長の米や理事、監事、美術顧問らが中心だが、総務担当として仲地毅⁽⁵⁵⁾、受付として柳生（旧姓：仲田）郁子がいた。柳生は、米より直接茶道の指導を受けている⁽⁵⁶⁾。柳生によると、米は芯の通ったまじめな方で御稽古などでは厳しい先生だったが、プライベートではまた違った表情を見せていたとのことである。

また、当館でボランティアに従事している島袋美智子は、展示室で猫を抱えている米を度々見かけている。島袋の茶道の師匠が米と兄弟弟子関係にあり、お茶のつながりで度々訪れたとのことである。

7. 大嶺薫コレクションの寄贈（1978年～）

7-1. 米によるコレクション寄贈の打診

1985年のコレクション寄贈前に、一度コレクション寄贈の話が持ち上がっていた。当館研究資料室に保管されている「大嶺薫コレクション寄贈に関する交渉の経緯」⁽⁵⁷⁾には、1970年代後半に館長の米から寄贈の話があったことが記録されている。

きっかけは1978年、米から薫のコレクションが当時の沖縄県立博物館に寄贈されてことに端を発する。この寄贈に対する感謝状を贈った際、将来的に

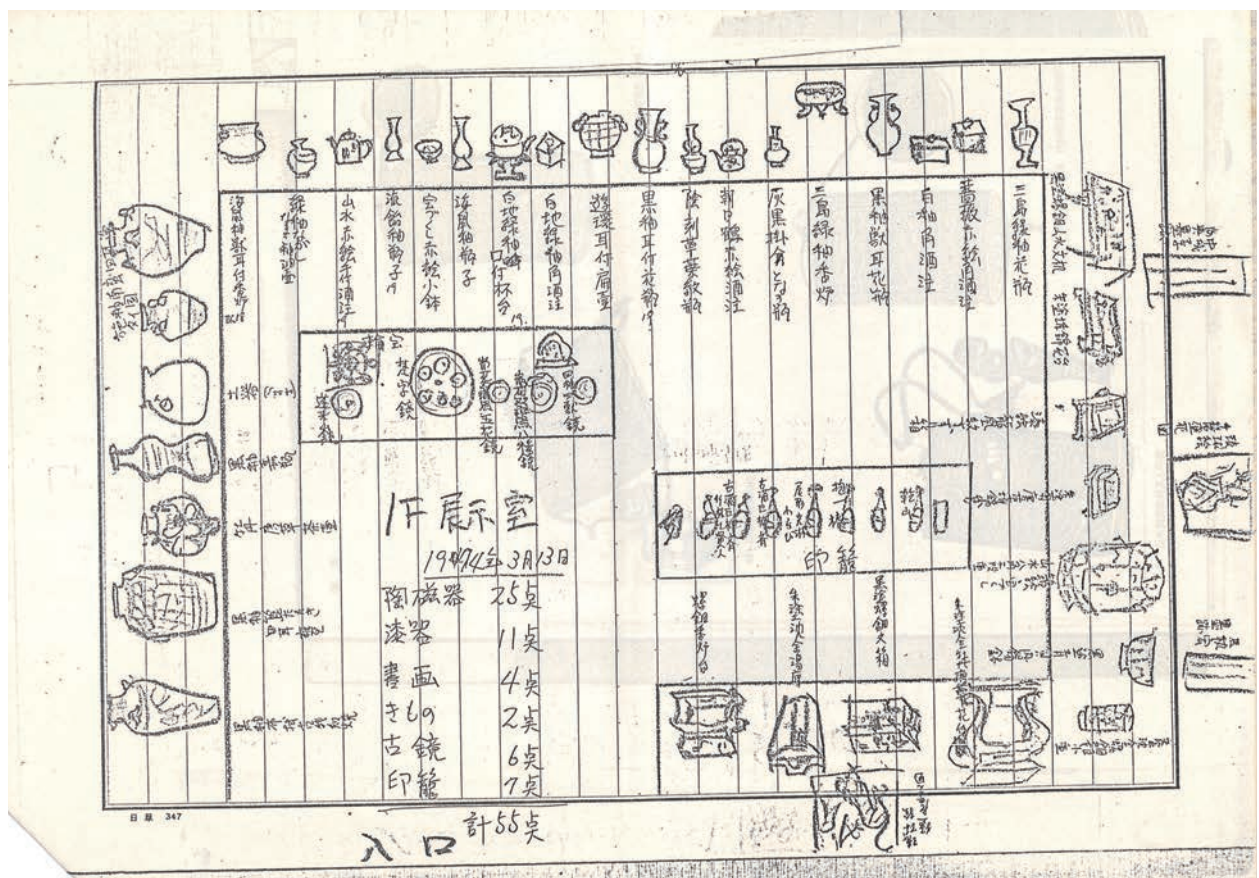
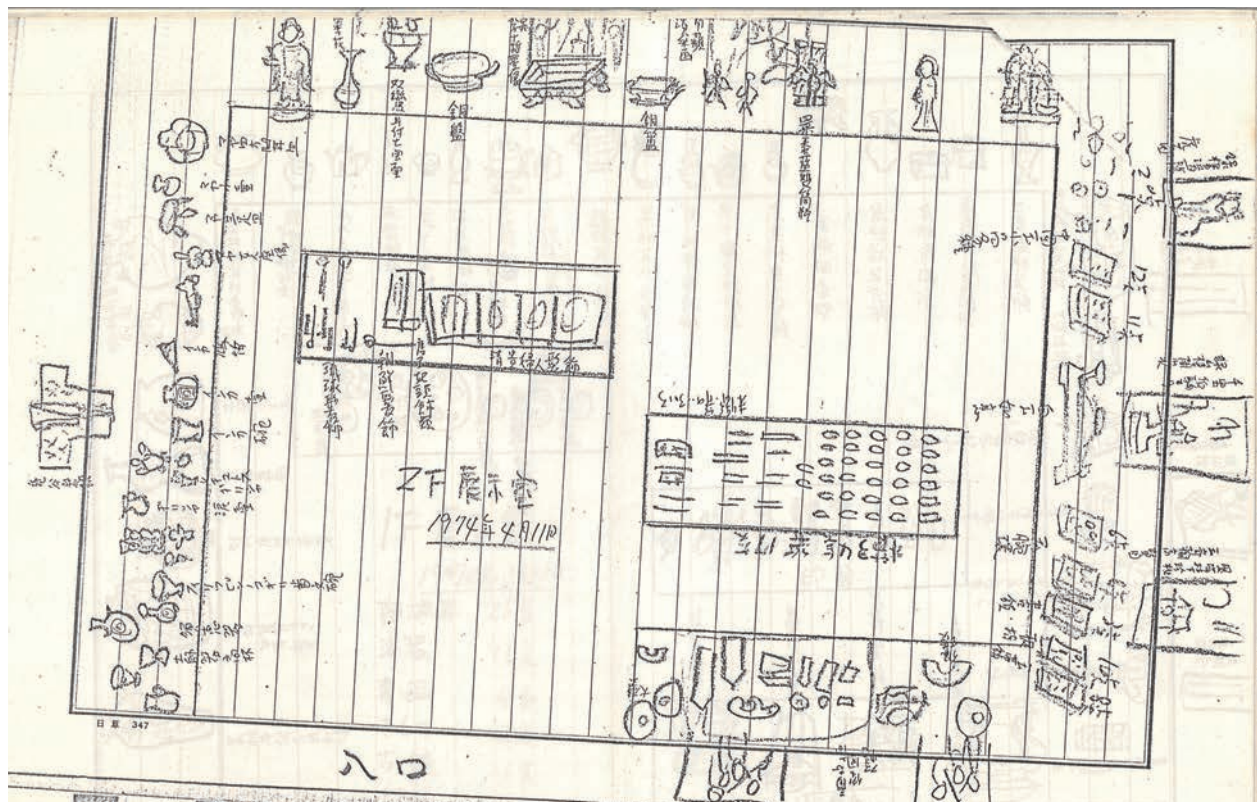


図 20. 21. 大嶺薫美術館展示室の簡易図面（上：2階、下：1階）（当館所蔵）

薫コレクションを博物館へ寄贈したい旨、その条件として大嶺薫の名を残すことと展示室を作ってもらいたいという話が行われている。

同年12月初旬に改めて米が来館し、再度寄贈に関する打診が行われた。これを受けて12月9日、博物館では臨時職務会が開かれ、コレクションを受け入れること、米から寄託願いを出してもらうこと、資料整理や写真撮影などの対応策は後日協議することなどが話合われた。

翌1979年3月14日、大嶺薫美術館においてコレクション移管交渉が行われ、コレクションを無償で寄贈していただくこと、その条件として館内にコレクション室と収蔵庫を設置すること、その条件が整ったときに契約することが決まった。以降、説明資料作成や資料の写真撮影などが行われ調整が進んでいたが、その矢先の1980年3月、米が逝去してしまう。

そのため、再度寄贈の調整が必要になった。

7-2. コレクションの寄贈

具体的な内容は判明していないが、米はコレクションを沖縄県立博物館へ寄贈するよう遺言を残していたようである。翌1981年3月に、薫夫妻には子供がいなかったため、弟の信雄が新理事長になる。

その後しばらくは大きな動きはないが、前述の通り1984年1月に盗難被害にあい、美術館側も危機感を募らせたようである。同月には理事会で美術品を博物館へ寄付することが決定し、2月23日に大嶺薫美術館仮目録贈呈式が教育長室において執り行われる⁽⁵⁸⁾。貴重な資料が多いだけに、コレクションを売り渡すこともできたはずであるが、米の遺言や薫コレクションの名を永代に残す方がよいとの判断から博物館へ寄贈するという事になった⁽⁵⁹⁾。これを受け、2月29日に寄贈受け入れの起案がなされ、2月28日に決済が下りる⁽⁶⁰⁾。当時の理事長である信一氏をはじめ、関係者には感謝の念が尽きない。

1985年3月20日に「沖縄県立博物館査定委員会」が発足し薫コレクションの査定委員会が開かれ、29日には大嶺薫コレクション贈呈式及び記者会見が行われた(図22)。このような経緯を経て、コレクションは寄贈されたのだが、3,000点余の膨大なコレクションであるためその整理には1年の時間を要した。

寄贈成立後の同年8月6日、「大嶺薫美術館の顕

彰候補申請について(伺い)」⁽⁶¹⁾が起案され、翌7日に決済される。これは日本博物館協会の顕彰館へ大嶺薫美術館を推薦するものである。推薦の理由としては「収蔵資料の大半が沖縄県立博物館に寄贈され、広く県民に鑑賞してもらうことになった」というもので、審査の結果、大嶺薫美術館は日本博物館協会の第33回全国博物館大会において顕彰館に選出された。

7-3. お披露目展とその後

寄贈されたコレクションは、1986年2月18日～3月16日にかけて、「特別展 美術工芸の美を求めて 大嶺薫コレクション」と銘打って公開された。初日に行われた開会式では大城立裕館長(当時)から信一氏へ感謝状が贈呈されている(図23)。

その後、博物館では常設展示室の一角に大嶺薫コレクションコーナーを設け展示を行い、おもろまちへ新装移転オープンするのにあわせ、毎年大嶺薫の顕彰を行うため「大嶺薫コレクション展」を開催するようになった。



図22. 大嶺薫コレクション贈呈式の様子
(右: 信雄氏、左: 大城立裕館長(当時)) (当館所蔵)



図23. 感謝状贈呈式の様子 (当館蔵)

跋

これまで薫の生涯については謎に包まれていた部分が多かった。しかし、今回親族が所蔵する資料や当時を知る関係者からの聞き取りにより、その一端を明らかにできたと思う。

戦後の混乱期、1tを超える円覚寺鐘楼がフィリピンまで持ち去られていたことを思うと、万国津梁の鐘や首里城正殿大龍柱などが今日沖縄で見られるのは、薫たちが東恩納博物館に集めていたからに他ならないだろう。また、彼のコレクションに含まれる2つの県指定文化財をはじめとする名品の数々も同様である。集めるという行為を通し、文化財の流出を防いだことが薫の大きな功績の一つと言えるだろう。

付け加えるならば、東恩納博物館で集められた資料群と薫が個人的に集めたコレクションは、その多くが当館に収蔵されている。特に東恩納博物館旧蔵資料は当館の最初期の収蔵品であり、当館の原点の一つともいえる。大嶺薫と彼が集めた資料は、当館の歴史を語るうえでも欠かせないと言える。

まだ不明な部分も多いが、戦前からのコレクション収集を通して知識をつけ、やがては博物館館長として、文化財保護審議委員として名実ともに文化の保護に努めたという点も今後改めて評価されるべき点である。

骨董という趣味を突き詰めることで、一個人を沖縄の文化復興に寄与した功績はひとときわ大きい。

大嶺薫コレクション展の担当として、今後も大嶺薫及び米夫人、信雄氏をはじめとする関係者の思いを踏まえ、大嶺薫の顕彰に努める所存である。

謝辞

令和2年度大嶺薫コレクション展開催並びに本小論執筆にあたり、薫の御親族、当時のことを知る関係者に様々なことをご教示いただきました。ここに感謝の意を表します。

注

- (1) 妻の米は、米子とも名乗っているが、本稿では混乱を避けるため「米」で統一する。
- (2) 薫の弟（四男）。
- (3) 沖縄県公文書館と沖縄県立博物館・美術館にそれぞれ所蔵されている。公文書館所蔵の履歴書は「財団法人大嶺薫美術館について」の一部である。同資料は、琉球政府文教局文化財保護委員会によって作成されたもので、米夫人が提出した申請書から設立許可までの行政書類である。博物館所蔵の履歴書はその下書き類と思われる、公文書館所蔵の資料とは内容が若干異なる。なお、博物館所蔵の履歴書は登録資料ではなく、学芸資料室に保管されている。
- (4) 上間朝久、名渡山愛順、中村俊夫、大嶺薫、多和田真淳、山里永吉、尚詮「松山王子尚順を語る座談会」（山里永吉編『松山王子尚順遺稿』尚順遺稿観刊行会 1969年8月10日）。
- (5) 尚泰王の四男・松山王子尚順によって開かれた農園。自身の邸宅を中心に周りの敷地も整備し、植物の収集・研究を行った。首里桃原にあったことから、町名を取って桃原農園と称したとされる。
- (6) (5) に同じ
- (7) (5) に同じ
- (8) 座談会の記録では「フウイユ」となっているが、「フーヌイユ（シイラ）」のことと思われる。
- (9) 松山御殿物語刊行委員会編『松山御殿物語一明治・大正・昭和の松山御殿の記録』発行：尚弘子 2002年8月1日
- (10) 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史料 沖縄諮詢会記録 印影本』沖縄県教育委員会発行 2001年3月29日。
- (11) 宮城悦二郎『占領27年 為政者たちの証言』ひるぎ社 1993年5月15日
- (12) (10) に同じ
- (13) 琉球新報 1955年11月15日。11月9日～11月15日にかけて5回にわたり掲載されたうちの最後の回。
- (14) 親族所蔵。企画展の開催されていた頃は、翁長良明氏に預けられていた。

- ⁽¹⁵⁾ (5) に同じ
- ⁽¹⁶⁾ 2021年5月11日、金武観音寺住職からの聞き取りによる。
- ⁽¹⁷⁾ (10) に同じ。同書1945年11月24日より。
- ⁽¹⁸⁾ 当館所蔵の金武観音寺資料返還に関する一件書類より。なお、本資料は登録資料ではなく、学芸資料室に保管されている。
- ⁽¹⁹⁾ (18) に同じ
- ⁽²⁰⁾ (18) および親族蔵の資料返還に関する報告書・受領書より
- ⁽²¹⁾ 萩尾俊明、多良間利絵子「沖縄県立博物館草創期に関するノート」(『沖縄県立博物館紀要』第23号 沖縄県立博物館 1997年3月31日)。
- ⁽²²⁾ (21) に同じ
- ⁽²³⁾ 親族蔵。
- ⁽²⁴⁾ 「さながら小美術館 温故知新の骨董あさり」(琉球新報 1959年1月26日)
- ⁽²⁵⁾ 大東糖業30年の歩み編集委員会編『大東糖業30年の歩み』大東糖業 1982年9月
- ⁽²⁶⁾ 信一氏からの聞き取り。薫から見ると甥にあたる。信雄の没後、薫関係の資料の大部分を引き継ぐ。
- ⁽²⁷⁾ 知念正喜 編『琉煙20年の歩み』琉球煙草株式会社、1972年5月
- ⁽²⁸⁾ 「誇り高きDS 大東糖業十周年を迎える」(『オキナワグラフ』1961年1月号 沖縄グラフ社編 1961年1月)。
- ⁽²⁹⁾ 「北欧風の香りとうまさーサントリービール発売」(『オキナワグラフ』1963年9月号 沖縄グラフ社編 1963年9月)。
- ⁽³⁰⁾ 「製缶1250,445ケース 創立十周年を迎えた沖縄製缶工業」(『オキナワグラフ』1967年8月号 沖縄グラフ社 1967年8月)。
- ⁽³¹⁾ 「特集 復帰に備える① 琉球商工会議所 新体制で復帰対策づくり」(『オキナワグラフ』1969年10月号 沖縄グラフ社 1969年10月)。
- ⁽³²⁾ (24) に同じ
- ⁽³³⁾ 2022年2月11日、元金環堂職員の村里武一氏、平良睦博氏、元大嶺薫美術館職員の柳生郁子氏より聞き取り調査を行った内容より。
- ⁽³⁴⁾ (33) に同じ
- ⁽³⁵⁾ (33) に同じ
- ⁽³⁶⁾ 「私のコレクション」(『オキナワグラフ』1959年2月号 沖縄グラフ社 1959年2月)。
- ⁽³⁷⁾ (36) に同じ
- ⁽³⁸⁾ 「皇女来島＝全日空の招待飛行＝」(『オキナワグラフ』1961年11月号 沖縄グラフ社 1961年11月)。
- ⁽³⁹⁾ 大嶺薫「シュープ大将に招かれて」(『守礼の光』1964年4月号 琉球列島高等弁務官府発行 1964年4月)
- ⁽⁴⁰⁾ 山里永吉「シュープ大将と大嶺薫 急逝した友人の冥福のために」(琉球新報夕刊 1970年10月12日)
- ⁽⁴¹⁾ (39) に同じ
- ⁽⁴²⁾ (39) に同じ
- ⁽⁴³⁾ (40) に同じ
- ⁽⁴⁴⁾ 琉球新報 1970年10月7日の訃報掲載欄より
- ⁽⁴⁵⁾ (24) に同じ
- ⁽⁴⁶⁾ 薫の妹・徳子(次女)の夫。
- ⁽⁴⁷⁾ 薫の2番目の弟(戦死)の息子。
- ⁽⁴⁸⁾ 薫の妹・千代(長女)の夫。
- ⁽⁴⁹⁾ 「大嶺薫美術館回議書・その他」の略年表より。当館に大嶺薫美術館資料が寄贈される際の一件書類で、寄贈から寄贈品をお披露目する「美術工芸の美を求めて―大嶺薫コレクション―」展実施までの起案文書などがつづられている。博物館所蔵の履歴書は登録資料ではなく、学芸資料室に保管されている。
- ⁽⁵⁰⁾ 沖縄タイムス朝刊 1973年7月18日。
- ⁽⁵¹⁾ (33) に同じ
- ⁽⁵²⁾ 財団法人薫美術館パンフレットより。製作年不明。
- ⁽⁵³⁾ 生前の大嶺夫妻と親交のあった柳生徹夫氏からの聞き取りによる。
- ⁽⁵⁴⁾ (33) に同じ
- ⁽⁵⁵⁾ (50) に同じ
- ⁽⁵⁶⁾ 本人よりの聞き取りによる。
- ⁽⁵⁷⁾ 1978年から1980年にかけての寄贈に関する交渉に経緯が記録されている。
- ⁽⁵⁸⁾ 『沖縄県立博物館50年史』沖縄県立博物館 1996年12月6日。「15. 沖縄県立博物館関連年表」より。
- ⁽⁵⁹⁾ 「大嶺薫氏と大嶺薫美術館」(『美術工芸の美を求

めて―大嶺薫コレクション―』沖縄県立博物館 1986年1月18日)より。

⁽⁶⁰⁾ (49) の一件書類の一つ。

⁽⁶¹⁾ (49) に同じ

